入れている。
あれもこれも無いといって何もないのかと言うとそうではなく目に見えない愛や善はあると言っている。意味はともかくお経は声を上げる響きに御利益があるという。私は声を上げると傍目に憚るので頭の中で唱えている。
一分で済むので心を静める時に唱えている。

委員コラム

「縛りからの解放」

富岡　ネム

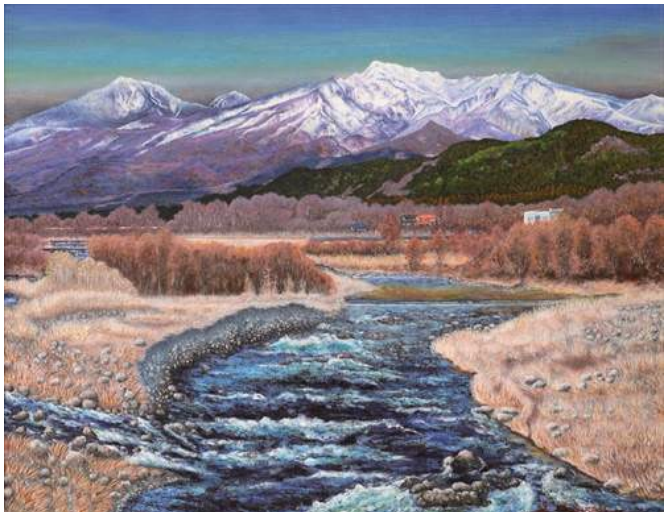
長いこと新日美の工芸部審査に関わってきて思ったことを、すこし。つい最近まで「工芸とは何ぞや」とおこがましくも大上段に振りかざした刃の落としどころを探していた。これでもかと作家集団につきつけていたのだけれど、結局は一人芝居に終わってしまった。高齢者の仲間入りを宣告されて急に腑抜けになったようだ。
美術館の要請に合わせた作品であることや技術、技法の陳列、生産性を加味した優美な作品等々は出品者、すなわち作家個々の立ち位置そのものなのだ。
審査員と言えども立ち入れない領域、優劣をつける方がおこがましいのではないだろうか。ここまではちょっと気分も下降気味。おまけにコロナウイルス蔓延で人類滅亡の危機などと連日の報道。高齢者は選別される身、これでは芸術を語る意欲さえ急降下。かつて終わりは次の何かの始まりである、と言ったものだが、今それが予感できるだろうか。
目を若者文化に転じてみよう。ドラえもんの世界が現実となり、キャッシュレス、五G、三Dプリンター活用により、今では先人達の努力成果の良いとこ取り合戦時代になっている。その結果若者達の文化には表現方法に分野、分かれ目などの仕切りや区別感覚がないように思われる。例えば一分動画を制作するためには空間、音響、舞台その他多岐にわたる表現に必要な作家の技術、知識、感覚、感情など高度の総合芸術的技術が要求される。今は理解不能でも若者にとっては容易な表現方法なのだろう。すぐに感動を共有できる時が来る。それを信じて筋トレに励むとしよう。
写真作品はロンドンのアートスクールに在学中の二一歳の孫。自身が作品。因みに本展には毎回この孫が題材となり出品しているが、自律してしまった。もうあっち側の若者になってしまった。

「無題」

厳冬の日光連山を描き　母校に寄贈

委員　蕪木　節男

この度、小生八〇歳を迎えるにあたり、その一つの区切りとして何とか恙無く円満な人生にお導きいただいた母校、栃木県立宇都宮商業高等学校の恩義に応えるべく、細やかな返礼の「意」を顕すため当協会の第三九回新日美展に入賞した油彩画「厳冬の日光連山」F三〇号を寄贈致しました。
当校の石川校長先生はじめ、和氣同窓会々長、塚田最高顧問等関係者一同大変喜ばれ、当校の中心とも言える大会議室に早速展示し、在校生はじめ来訪者等に紹介致すとの事です。
本件については、讀賣新聞、産経新聞、下野新聞の各紙に掲載され、当協会の委員の端くれとしてPR活動の一端を担えれば幸いと思っている。



寄贈作品
「厳冬の日光連山」